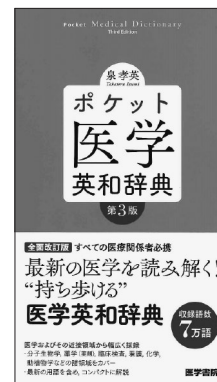


BOOK Review

ポケット医学英和辞典 第3版

評者 富岡 洋海 神戸市立医療センター西市民病院・呼吸器内科部長



泉孝英先生による『ポケット医学英和辞典』第3版が出版された。辞典に「書評」というのも、おかしな企画と思われるかもしれないが、これは単なる辞典ではない。それは、故・渡辺良孝博士による1967年の初版以来、脈々と受け継がれてきた崇高で、そして謙虚な学びの精神「欧米から最新の医学を学ぶ」が宿っているからである。この「第3版序」には、第2版出版(2002年)からの医学・医療の変動が解説されており、この辞典に「現代性を与える(故・渡辺博士)」ことが理念とされていることがわかる。その流れの中で、医薬品、医療機器の開発のほとんどは米国を中心に行われている現状を嘆きつつも、急速な変貌・進展を遂げる米国医学・医療の的確な把握こそが、わが国の医学・医療の向上につながる、と結んでいる。この辞書の価値は、この泉先生の信念にある、と言っても過言ではない。

収録語数は7万語と膨大なものになっているが、驚くほどコンパクトで、まさに“持ち歩ける”辞典となっている。収録語については、“Dorland's Illustrated Medical Dictionary”や“Current Medical Diagnosis & Treatment”などを参照し、また、八幡三喜男博士による“The New England Journal of Medicine”からの緻密な情報も取り入れて、用語の刷新、削除、追加が的確に行われている。うれしいことは、略語の収録が充実していること、薬剤名も充実し、薬剤用語集としても活用できること、さらに、

医学研究者とその業績までもが収録されており、世界医学人名事典としても活用できることである。この膨大な人名の収録は、「日本近現代医学人名事典【1868-2011】」(医学書院, 2012)という大著も出版されている泉先生の真骨頂である。「欧米から最新の医学を学ぶ」とともに、「過去から学ぶ」姿勢も大切にしてほしい、とのメッセージである。

時はICT (Information and Communication Technology)の時代である。小冊子のポケットマニュアルの代わりに、タブレットパソコンをいじる研修医諸君との毎日を送っている私ではあるが、やはり、この『ポケット医学英和辞典』という“字引”もお勧めしたい。ICTは膨大な情報を瞬時に提供してくれる。しかし、その中から、何を信頼し、何を選択すべきかについては、若い彼らには荷が重かる。さらに、現在の医学は、分子生物学・遺伝学のみならず、広く薬学、看護、介護などとの連携が重要である。専門外の領域からの情報選択にも、ICTの時代であるからこそ迷うことも多い。そこで、賢者の確かな、そして、老練な選択が散りばめられた本辞典は、確かな道しるべとなるものである。そして、各人が学んだ印を、歩みを、直接書き込める「紙」という媒体は捨てがたい、と私は考える。ICT時代にこそ信頼できる紙の“字引”が必要なのである。

泉 孝英 編、八幡 三喜男・長井 苑子・伊藤 穰・Simon Johnson 編集協力
新書判/1,282頁/2017年/定価(本体5,000円+税)/ISBN978-4-260-02492-1/医学書院刊